



# 34団ニュース

日本ボーイスカウト 横浜第34団 発行

No.19

GoodBye 2004

&

Welcome 2005

2004年も終わろうとしています。  
今秋は、ビーバーカブラリーやカトリックボーイスカウトの日  
などさまざまな楽しい行事が行われました。  
また、台風や新潟中越地震など天災も多かったです。  
みなさまは、いかが過ごされましたか？  
各隊から支援活動報告や行事の報告をご覧ください。

## カトリックボーイスカウトの日

ビーバー隊奉仕者 船山 求

10月2日(土)汗ばむほどの陽気の中、カトリック中原教会にて「カトリックスカウトの日」CBS神奈川支部合同集会が開催され、神奈川地区カトリック教会に所属するボーイスカウト6団、及びガールスカウト2団が一同に会する機会を得ました。山手教会からもボーイスカウト、ガールスカウトが参加しました。

開会式に続き、中原教会古川神父様司式によるミサが執り行われました。その後は各団複数の組に分かれ、中原地区の自然を存分に味わうゲーム形式のラリーが行われました。

普段はなかなか行動を共にする機会に恵まれない各団ですが、神に誓いを立てる者同志、時に中学生のスカウトが小学校1年生のスカウトに気遣い助け合いながら、時に各組同士競い合い、日ごろのスカウト活動の成果を遺憾なく発揮することが出来ました。各組とも事故もなく全員完走、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

中原教会及び同教会所属の川崎第22団ボーイスカウトの皆様には、事前の準備からゲームの進行まであれこれとご手配、ご配慮頂き、スカウト一同有意義な1日を過ごすことが出来ましたこと、この場をお借りしお礼申し上げます。

この文章は教会報「やまて」10月号にも掲載されました。

## ビーバー・カブラリー

ビーバー隊副長 佃 宣隆

11月21日の日曜日に舞岡公園において2004ビーバー・カブラリーが開催され、全体で100名を超えるビーバースカウトが参加。34団からは5名のビーバースカウトが参加しました。

当日は雲ひとつない快晴で、まだ朝もやが立ち込める会場は、ここが横浜市内だとは思えないような田園風景の広がる、当プログラムには最適な環境の中で行われました。

続々と集合してきたスカウトたちの元気な「おはよう」の声から始まり、開会式・オリエンテーションの後、早速、メインプログラムであるラリーのスタートです。

本ラリーでは、この広大な会場の中に定められた25のポイントを時間内で見つけ出し、各団に用意されたカードの中の該当ポイントをつぶしていく「ビンゴでまいおか」。会場の中に落ちている枯葉や小枝、木の実などを用いて画用紙に絵を創作する「このみがクレヨン」。そして、場内で出会った他の団のビーバースカウトとじゃんけんし、勝った方がどんぐりを獲得する「どんぐりじゃんけん」の3つのゲームを体験しました。

「ビンゴでまいおか」は、時間と体力からスカウトの足で25ポイント全ては無理であろうと、当初リーダーたちは思っていました。全員が一丸となって場内を元気いっぱい駆け回った結果、24ポイントまでGET！最後のひとつが見つけれずにちょっと悔しい思いもしましたが、最終的にはみんな満足でした。

「このみがクレヨン」では、当公園が草木を傷めたり、生き物を採ったりすることが禁止されているため、落ちているものだけでの創作であり、はじめはスカウトたちに多少の戸惑いもありましたが、ひとりがいろんなものを拾ってきて上手く画用紙に貼り付けだすと、みんなも見よう見まねであっという間に完成！

そして「どんぐりじゃんけん」では、他の団のスカウトと出会うたびに元気にじゃんけんをしました。なかでも鈴木スカウトは、びっくりするくらいの元気な声でじゃんけんし、連戦連勝！合計27個ものどんぐりをGET！鈴木スカウトのどんぐり獲得数が全体で1位となり、閉会式で大きな輪になったスカウト全員からの祝福を受け、得意満面！大きな自信になったと思います。

今回のラリーは、自然がいっぱいで起伏のある広大な会場とすばらしい天気、そして、運営面をご担当くださった各団の方々にも支えられて、大変に有意義な一日であったと確信しております。それは、全てのプログラムに全力を出し尽し、充足感にあふれたスカウトひとりひとりの帰りの表情を見れば明らかです。

ありがとうございました。

# 新潟復興支援ボランティア報告

ローバー隊 川口 翔  
池田 康彰

平成16年10月23日(土)、新潟県中越地方で震度7の大地震が起こり、多くの死傷者を出し、中越地方の人たちはそのほとんどが避難生活を余儀なくされた。ライフライン、交通機関にも多大な影響を与え、一部の地域では未だ復興の目途が立っていない。...我々にできることは何なのか。悠長に考える間もないまま迅速性を第一に考え、身体一つで現地に趣いた。以下は活動の概要とその報告である。

## 【概要】

目的:新潟県中越地震復興支援

活動場所:新潟県小国町(現地ボランティアセンターとは連絡済) 活動期間:  
11月1日(月)~11月7日(日)

移動手段:乗用車

ルート:関越道 上越道 小国町

作業内容:ボランティアセンターの指示に従う

宿泊場所:小国町森林公園内にベースキャンプを設置

お金:基本的に自己負担

## 連絡窓口、情報総括担当者(新潟現地)

加藤洋平 東京連盟豊島第4団 / 新宿第2団(早稲田ローバース)

## 後方情報支援(関東待機が主 一時現地)

木津雄生 千葉県連盟松戸第5団

## 後方情報支援(関東待機が主 一時現地)

木津雄生 千葉県連盟松戸第5団

## 11月1日(月) 横浜 新潟

00:00東戸塚駅集合。予定どおり出発し第三京浜 関越道 上信越道を利用し

06:30頃、活動予定地である小国町へ辿り着いた。

町役場から少し離れた森林公園に設営したベースキャンプで既着のスカウトたちと合流したところで朝食をとり午前中は休憩(仮眠)。

午後から役場内に設置されたボランティアセンターでボランティア登録を済ませ、その日の業務を割り振ってもらう。この日は震災で散らかった役場内の倉庫整理の仕事を頂き、それに務めた。

初日の印象として感じたことは、小国町においては、震災による甚大な被害が報道されている長岡、小千谷ほどひどい様子はなく、比較的落ち着いた雰囲気であった。しかし、アスファルトに大きく亀裂が走っている光景や、役場内に積み上げられた救援物資を見ると「自分は被災地に来ている。」という臨場感を強く感じた。

## 11月2日(火) 小国町 農業環境改善センター

朝08:00 今日は朝から小国町役場にてボランティア登録(毎日必要)を済ませる。先週小国に来ていた先発隊の手配でボーイスカウトは“農業環境改善センター”“就業改善センター”“保険センター”を中心とした奉仕活動を任されており、我々は“農業環境改善センター”(“農環”)及び“就業改善センター”に赴いた。業務としては事務所に詰める職員の補佐的なもので、テレビで観る炊き出しや肉体労働的なものをイメージしていたためちょっと意外な感じだった。しかし、この二つのセンターの職員は役場の方なので、震災直後から町の運営に奔走してきた職員の方々が一息つくためには必要な役目であり、これも大事な務めである。実際に訪れた“農業環境改善センター”と“就業改善センター”は避難所&救護所となっている建物で(二つのセンターは隣接している)、“農環”の広い体育館には60人弱の方々が未だに避難生活を送っているらしい。利用者のうち、殆どの方は日中自宅など各々の場所に赴き、夜を越す場所がない方々のみが宿泊の場として利用するため、昼勤務の間は殆ど利用者に会うことはない。というのも、日中は殆どの方が自宅を始め、各々の目的地へ外出していき、人によっては安全が確認されたため帰宅するという方もいるという。ここでの事務所の仕事は、主に利用者の掌握と生活環境の改善とみたが、日中に利用者は殆ど不在のため掌握については殆どやりようがなく、生活環境について特に業務として行うべきことは少ないのだが、事務所内の清掃や救援物資の提供など、やることは自分たちで探して動いた。

### 救援物資

小国町に限っては被災者への救援物資は概ね行き届いているようで“農環センター”の廊下には毛布、トレイレットペーパー、懐炉などが段ボールで積み上げられていた。町として姉妹定型都市(?)の東京武蔵野市からの援助を独自に受けているようだ。震災発生から救援物資は逸早く全国から寄せられたため、必要最低限のものは既に揃っていたようで、むしろ地域によっては飽和状態なところもあるとか。最低限のものが揃ってはいるものの、救援物資として手配される食料はどうしても種類が限られてしまうため、現在のニーズとしては食のバリエーションが求められている。また衣類(特に下着類)なども生活に関わるものとして、需要があるようだ。

### 被災者の現状

“農環センター”を利用している60人弱の被災者(11/1日付)のうち、殆どの方は日中自宅や知人の所など各々出掛けて行くのだが、どこにも帰らず非難所に残った方々が7人程おり、年配の方と中学生小学生を含む家族であった。彼らを始め、被災者の大半は震災以来、十日以上も入浴できずにいる。しかしここ数日で、ようやく銭湯のボイラーが復旧し公共の浴場として利用されるようになり、銭湯へ行くために避難所を回る巡回バスも走るようになった。家屋について、倒壊を免れても修繕が困難、あるいは危険と判断された家屋には、行政から取り壊しの通知が玄関に貼り付けられる。それを俗に“赤紙”という。「被害」ということはよく言われるが、直接的な“倒壊”などは、一見してわかるものではなく、外観を見ただけでは判断がつかないことが多い。

11月3日(水)

新潟 東京川口はキャンセルできなかった用事が11/4にあり、配車の都合で11/3の朝、ベースキャンプを発ち、一路東京を目指した。 11月4日(木) 新潟 横浜池田は土日に大学の用事があったため、この日に帰宅。 11月5日(金) 横浜 新潟 川口:いくつか雑務をこなし、再度新潟へ向けて電車移動。

### 11月6日(土) 十日町 きのことハウス

新潟復興支援第2部。小国町での活動においては必要な人員が最小限の四名で足りるようになったため、昨晚到着したチームと共に計6名で活動のフィールドを十日町に変えた。 十日町は小国町よりも震災の傷跡が目立ち、集まってきたボランティアの数も多い。そのためか受付には静岡大学の学生が参加していた。作業については小国であった事務所の補助員的なものだけでなく、労働的な作業も多いようで我々は「きのこハウス」という“きのこ(えのき)”の養殖場の片付けについた。トーチカ(?)の中に並んだ棚に積み上げられた無数の“えのき”が震災で棚ごと崩れ落ちてしまったため、それを拾い直し片付ける作業を行った。ひたすら拾い続け、しばらく“えのき”は見たくなくなった。

### 11月7日(日) 小千谷市 吉谷保育園 / 新潟 横浜

一旦ベースキャンプを引きあげるため、業務は午前中のみに限られた。しかし、活動場所の小千谷市吉谷保育園では朝の炊き出しが必要なため05時にベースキャンプを出発。朝の炊き出しということで勇んで向かったが、避難所になっている保育園を利用している方は十名弱で炊き出しの味噌汁も十名分でよいとのことであった。炊き出しはすぐに済んだが、それに加え午前中は月曜(11/8)から再開される保育園の復帰・清掃作業に務めた。

### 吉谷保育園

吉谷では未だに断水が続いており園庭には仮設トイレやポリタンク、炊き出し用のテントが置かれている。また、やはり地震の影響とおもわれるヒビ割れも何箇所かにみられた。周囲には倒壊した家屋や傾いて並ぶ電信柱など、園から辺りを見回すだけでも小国町とは随分と印象が異なる。また、道路はテレビで観るようにアスファルトがひび割れており、ひどい所は、ゆがんだアスファルトを丸ごと剥がしている。とりあえず道路は概ね車が走れるくらいには復旧されているものの、アスファルトを剥がしてジャリを敷き直すなどの措置が多いように思えた。

(ピンポイントにはアスファルトを敷きなおしているようだが)

## 活動を通じて

よかったこと(スカウト的に)

震災発生から全国各地のスカウトたちが新潟に対して目を向け現地へ向かったり、義捐金を集めたりと、アクションを起こしたこと。

今回の我々の活動はスカウトたちのネットワークの賜物だと思う。もちろん大前提にスカウトたちの意思があつてのことだがその上に、これまで他地区、他県連との活動を通して知り合ったスカウトたちの縁があつて初めて関東レベルで素早い情報伝達、人員確保が成り先発隊の初動から2週間弱の支援活動を継続的に行うことができた。

我々とはまた別で有志を集い現地に赴くグループもいた。先月ICTシンポジウムが『情報通信技術の青少年プログラムに果たす役割』というテーマで開催されましたが、携帯電話、インターネット、E-mailを駆使して相互に連絡を取り合いスカウトのネットワークを最大限に生かしたことは今後のスカウト活動においてとても重要である。そして何よりその目的がスカウト運動の根本のひとつである“奉仕活動”に向けられたこと、新潟の被災者のためにスカウトたちが動いたことが一スカウトとしてとても嬉しく思う。

## 今後必要(そう)なこと

これから雪の季節になる頃には除雪作業のボランティアが必要である。プレハブ小屋の屋根は平面なので新潟の豪雪にはあまり向かないという懸念や“寒さ”を考えると、人的、物資的なニーズも高まるのかもしれない。



新潟の中越地震から早1ヶ月が過ぎようとしています。被災地では徐々に復興の兆しが見えるとはいえ、これから冬をむかえるにあたって厳しい状態がつづきます。また10月23日の当日は関東周辺でもかなり揺れ、ここ10数年いわれている関東地震のことを考えざるを得ません。私たちは普段から「そなえよ、つねに」の言葉をモットーに活動しています。いざというときに落ち着いて行動するには、それなりの学習と積み重ねが必要です。私が日本赤十字社救急法指導員のボランティアのお手伝いをはじめてから、その度にみなさまにお話することは、家族の方に万が一という事態のとき、どう対処したらよいかということです。日常茶飯事のかすり傷や多少の打ち身などは生命に関わりませんが、もし呼吸が止まってしまった時はどうしたらよいでしょう。その時にとっさの技術(対処)ができれば、助けることができたのにみすみすかけがいのない人を失うこととなります。その技術はある程度練習すればだれにでもできるのです。呼吸が止まってしまう状態とは、喉にもものがつまって窒息状態になる、水の事故でおぼれてしまう、ショックで意識をなくす(悪くすると死に至る)、大出血、大火傷、薬物・ガス・化学物質中毒と身の回りに数限りなくあります。このような状態のときに人工呼吸法(口から口へ吹き込む方法)ですが、もっと難しくいえば心肺蘇生法を学んで練習していれば、小学生でも人を助けることが出来るのです。現在日本赤十字社では幼児安全法という講習会を実施しております。

小さいお子さんをお持ちのお母さん、お父さんに是非受講していただきたい講習会です。日常子供におきやすい事故は**\*年齢別にみた事故の特徴**を参照していただけるとお判りのように、思いもかけないことがおこってその為に死に至ることなのです。0歳では窒息が最も多く、次に溺死・溺水です。1～4歳までは交通事故が最も多く、次に溺死・溺水、3番目に窒息です。5歳以上は行動範囲も拡大するため、交通事故が最も多く、次に溺死・溺水です。このことから常日頃の事故の予防がいかに大切であるのかがわかります。家庭内の危険な箇所をチェックし、そういう所に子供が立ち入らないよう安全対策を講じて(常に家庭内を整理整頓して)危険物をさけるようにこころがける必要があります。また子供自身が自分の命やからだを守り、安全な生活ができるよう、発達段階におうじて指導することが必要です。そのためには、からだを通じて体験教育をさせて大人が正しい生活行動をしてみせることが大切なのです。子供の運動機能を高める遊びをさせること、すなわち歩く、走る、飛ぶ、押す、引くなど、基本的な運動を積み重ねによる全身的な遊びによって体力が高められます。そして社会のルール(交通のルール、遊びの中のマナー、道具の安全な使い方等)を学ぶことによって自分自身の安全を守る能力が養われ、ひいては将来自分のことばかりではなく、まわりにおられる方たちのことを思いやることにつながるのです。

## \* 年齢別にみた事故の特徴(主なものを幼児安全法講習教本より抜粋)

- 1～2歳 窒息 : 乳とかその他の食べ物を気管に吸い込む。  
ビニール袋や風船をかぶる。または顔にのせる。
- 溺水 : 浴槽や洗濯機に転落する。  
屋外での水遊び用プール、溝、池での溺水。
- 3～4歳 交通事故 : 道路で遊び、車にひかれる。  
飛び出しによる事故。車との接触。
- 溺水 : 水泳中に溺水。  
川、沼、海での溺水。
- 転落転倒 : 高いところに昇り転落、(ベランダや階段から転落)  
走り回って転倒。
- 熱傷 : 食事のとき、熱いものをこぼす。使用後のアイロンにふれる等。
- 5歳以上 屋外での事故が多く、3～4歳の事故と同じ。

## 平成16年行事経過及び予定

- 10月 2日 CBSボーイスカウトの日  
10月10日 ハローヨコハマ  
10月23日～24日 山手教会バザー  
11月 4日 カブ隊ラウンドテーブル  
11月21日 ビーバーカブラリー / 舞岡公園  
11月28日 ラーメンサンデー  
12月18日 団クリスマス会  
1月 1日(祝) 平成17年新年旗揚げ式  
1月 8日～10日 日韓スカウトフォーラム  
1月22日 餅つき大会  
1月23日 平成17年度登録説明会

ご協力ありがとう  
ございました

皆様のご協力、参加を宜  
しく願います!!!

### 編集後記:

各隊からの活動報告はいかがでしたでしょうか?  
報告から、楽しく・有意義なプログラム・支援活動が過ごせた事がお分かり  
いただけたと思います。  
今後の活動も期待していきましょう! 団新聞カラー版は、下記ホームページ  
に掲載されております。是非チェックしてください。

<http://www.bsy34.com>

また、ご意見をメールで頂戴いただければ幸いです。

[hasedon34@yahoo.co.jp](mailto:hasedon34@yahoo.co.jp)

神に感謝

2004年  
12月18日発行  
第19号

発行/  
日本ボーイスカウト  
横浜第34団